特集

「書くこと」の日常化を目指して

「書くこと」へ向かう意志を生かす
―「書くこと」の日常化のために

早稲田大学教育・総合科学学術院
町田　守弘

一　学習者の日常から「書くこと」の学びへ

子どもたちが文章を書かないという声や、文章を書くことが嫌いだという声をよく耳にするが、実は彼らは日常生活の中で多くの「書くこと」の活動に携わっている。その一つの例として、携帯電話を通してメールの交換に熱中する場面を挙げることができよう。携帯電話は通話の機能よりもメール機能の方が多く用いられる。「ケータイメール」の出現によって、子どもたちは以前よりも遥かに「書くこと」を実践するようになった。さらに「ブログ」を精力的に書いて公開し、「プロフ」と称される自己紹介の文章を交流して、ネット上で「友人」を獲得している。SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）を利用すると、多様な「書くこと」の活動を通して新たなコミュニティが形成される。このようなケータイやネットが抱える「闇」の部分に対する認識が必要なことは当然のことだが、本稿では子どもたちは書くことが嫌いでないという事実に注目したい。彼らの中には、「書くこと」へ向かう意志が内在している。「書くこと」の学びを構想する前に、まずこの事実を自覚的に押さえておきたい。

これからの学校は文化の伝達という目的を超えて、学習者にとって楽しくかつ面白い要素を、もっと大胆に取り入れる努力をするべきではないだろうか。教師はまず教科担当者として、担当科目の授業内容に楽しい要素をどのように導入するのかを真剣に模索しなければならない。国語教育は今後、学習者にいかに楽しくかつ価値あることばの活動をさせるかという点を追求するべきである。「書くこと」の学びにおいては、子どもたちに内在する「書くこと」へ向かう意志を、いかに有効に引き出すかという課題に対応する工夫が求められることになる。

学習者の現実を踏まえて「書くこと」の学びを構想する際に、まず次の三点を目標として押さえておきたい。

① 「書くこと」に対する興味・関心・意欲の喚起。
② 「書く」ための場の設定。
③ 円滑に「書く」活動へと導く手引き（課題）の工夫。

第一に掲げた点は、「書くこと」の学びの最も基本的な要素である。この目標を達成す

るためには、子どもたちの意欲喚起につながる学習材を開発することが重要である。そして第二点として、単に書くための技術を教え込むだけではなく、必ず学習者が実際に書く活動を展開する場所を学びの中に確保する必要がある。「書くこと」の学びは、実際に書く活動を伴うことによって成立する。いかに効果的な活動の場を設定するかが、指導者側の工夫にかかっている。そして第三点として、無理なく表現活動へといざなうことができるような、適切な「手引き」すなわち学習課題を工夫することもきわめて重要である。以上の三点の目標は、相互に密接に関連する。

二　「日常」と「学び」を結ぶために

「書くこと」の学びを構想する際に重要なことは、学習者の「日常」と教室での「学び」とを有効に結ぶことである。そのための具体的な方策として、次の二つが考えられる。

① 教室を離れた日常の中で、「書くこと」に関わる課題に取り組ませること。

② 国語科の授業の中で「書くこと」の活動を推進し、日常の場面に生かすこと。

第一の方策は、国語科の課題として「書くこと」につながるものを用意して、教室を離れた日常の中で取り組むように導く方向である。「書くこと」の学びは授業時間の中のみで完結するものではない。授業内容に関連したものとは別に、「年間課題」として一年間を通して継続して取り組むことができるような課題を工夫してみたい。国語科は日常生活において常に用いられることばを直接学ぶ教科ということで、日ごろからことばに対する関心と問題意識を高めておく必要がある。

年間課題の具体例として、「ワードハンティング」と称する課題を紹介する。これは、学習者が身近な場所から様々なことばを採取するという課題である。新聞・雑誌や本はもちろん、CM、テレビ番組、映画、ゲーム、歌詞など、身近な場所から新しく出会ったことばや意味を確認しておきたいことばを選んで、B6サイズのカードに一枚に一項目ずつ記入する。まず採取したことばを「見出し語」として記入し、続いてそのことばの意味、用例、出典、採取年月日をしっかりと記入する。少しずつことばのストックが増えたところで、集めたことばについてグループ学習の形態によって学習者が相互に情報交換をする。クラスメートが採取したことばを新たな学習材として、さらにことばのストックが拡大することになる。

集めることばは単語のみにとどめずに、成句の単位で扱うこともできる。採取する場所としては、主にCMのキャッチコピーなどが考えられる。短いフレーズに凝縮された表現の工夫を、学ぶことができるからである。これは「フレーズハンティング」と称する課題だが、表現に対する学習者の興味・関心を育てることが目標となる。「ワードハンティング」と同様にB6サイズのカードに一枚一項目を厳守して整理する。ことばとともに表現に対する関心を育てることは、彼らの意識を着実に「書くこと」へと向かわせるものである。このような課題を通して学習者の語彙を豊かにし、言語表現に対する関心を育てることは、彼らの「日常」と教室の「学び」とをつなぐための一つの手立てとなる。なお課題に対して求められる要件は、学習者の興味・関心を引き出すようなものであること、課題としての負担があまり過剰にならないこと、そして国語科の学びに直結するものであることの三点である。

続いて第二の方策は、国語科の授業の中に「書くこと」の活動を積極的に取り入れ、そこから学習者の日常の書く活動へとつなぐことである。わたくしは、原則としてすべての授業で毎時間、「研究の手引き」と「授業レポート」および「研究資料」と称するプリントを準備して、それに即した展開を工夫している。すでに長期間にわたってこの方法によって授業を組織しているが、毎回担当者側の負担相

応の教育効果を確認することができる。「研究の手引き」には、その授業の目標、学習活動、評価の観点、課題、次回の予定などを整理して示す。「研究の手引き」によって、学習者が授業の目標や課題を確認し、的確な学習活動が可能となる。また「授業レポート」は、学習者が授業の展開に即して記入して、全員が授業終了時に提出する。「授業レポート」で個々の学習者の状況を可能な限り把握し、常に効果的な授業内容を模索することができる。「研究資料」には、授業に関連した副教材や参考資料を載せて配布する。

先に「書くこと」の学びの目標の第三点として掲げた「表現のための場の設定」という事項との関連から考えるとき、「授業レポート」はまさに書くための「場」として機能すると言えよう。毎回提出となる緊張感は、学習者の意識を「書くこと」に向かわせる。また、書くことによって考えをまとめるという練習もできる。さらに個々の学習者の学習活動を評価する際にも、「授業レポート」は効力を発揮する。そこには、学習者の自己評価と、グループ学習時の相互評価の要素も含めてある。「授業レポート」に収録される学習者のナマの声に耳を傾けながら、授業を進めるように心がけてきた。あくまでも一つの実践例ではあるが、このような「研究の手引き」「授業レポート」「研究資料」を用いた指導によって、指導内容の徹底および充実を図ることができる。授業時に「授業レポート」に記録することを通して、書くことの習慣を身に付けることで、学習者の日常における書く活動への発展が可能になる。このような「授業レポート」の扱いもまた、「学び」と「日常」とを架橋するものである。

三　「書くこと」へ向かう意志をどう生かすか

冒頭で「ケータイメール」の話題を出したが、たとえば「ケータイ」と「書くこと」とを結び付けるという発想が必要である。それは、「書くこと」の日常化を目指すという課題へのアプローチのための一つの視座となる。この問題に関して府川源一郎は、「ケータイ作文の可能性」（日本国語教育学会『月刊国語教育研究』二〇〇三・七）においてケータイメールを取り上げた。府川は学習者の現実に着目し、その現実の中にある素材を「切って捨てる」ことをせず、逆にその素材の「可能性」を取り上げて新たな授業を構想しようとする。さらに「生活綴り方」における洋紙と謄写版という印刷手段の普及に着目し、携帯電話という機器の普及の中に今後の「可能性」の一つの要素を見出している。注目すべき提言である。

日常生活の中で子どもたちが意欲的にメールの送受信を繰り返すという事実に目を向けて、「書くこと」へ向かう意志を確認しておきたい。そこには、情報の双方向性という要素も存在する。すなわち情報を一方的に送信するだけではなく、必ず相手からの返信を期待するという意志を確認することができる。返信のスピードと、相手との人間関係を対応させて考えるという側面もある。そして、それはあくまでも相手と顔を合わせての直接的なものではない、間接的なコミュニケーションに限定されるという点も重要な要素である。このような間接的かつ双方向の交信を可能にするという要素をメールの特性として把握し、それを教室での「書くこと」の学びに取り入れることができる。以下に、「交流作文」と称する具体的な実践の概要を紹介したい。

わたくしは中・高一貫の私立学校に勤務した経験から、異なる学年の間でメッセージを交流するという形態を取り入れた「書くこと」の学習指導を展開したことがある。高校生の授業で「後輩へのアドバイス」というテーマで中学生に宛てた手紙を書かせ、それを実際に中学生が読んで感想をまとめるという実践である。中学生・高校生の双方が相手からの反応に強い関心を寄せた。プライバシーの問

題があることから、実際の氏名は使用せずにすべてイニシャルで対応することにした。同じ学校の中学生と高校生との「交流作文」によって、彼らの「書くことへと向かう意志」を引き出すことができる。

大学生の教職課程における「国語科教育法」の授業では、高校生に向けて短作文の課題を発信するという内容で展開した。十分間に八〇〇字程度の文章を書くという前提のもとで、大学生に課題を考案させる。作成された課題は、そのまま実際に高校生に課題に即して取り組ませた。その結果書かれた文章は再度大学生に戻して、評価を実施することになる。高校生には与えられた課題に対する作文とは別に、課題そのものに対する感想も書かせることにした。

このように相手を想定して書くことは、今日のメールにおけるコミュニケーションにつながる。学習者の生活する「いま、ここ」の文脈の中から適切な状況を取り上げて、学習のテーマとする。そのテーマをめぐって異なる学年の間でのインタラクティブなメッセージの交流を実現することによって、「書くこと」の学びの新しい可能性を開くことが期待できる。以上のような取り組みを「交流作文」と称して、二〇〇七年現在も実践しているところである。

四　新しい「書くこと」の学びへ

本稿ではまず学習者の日常の中にある「書くこと」へ向かう意志を確認した。「書くこと」の学びにおいては、その意志を引き出すように心がけることが重要である。そして学びの過程で常に書く活動の場を自然な形で設定することによって、無理なく「書くこと」へと向かわせるようにする。学習者の日常と学校とを隔てる境界を越境して、書く活動へといざなう。そのためには、興味・関心を十分に喚起し得る学習材を提供する必要もある。わたくしは、漫画、アニメーション、映像、音楽、ゲームなど「サブカルチャー」に分類されるものの学習材としての可能性を追求してきた。これらの中には、「書くこと」の学習材として多大な効力を発揮するものがある。

学習者によって書かれた文章は、グループレベルで相互評価を実施し、クラス全体においても吟味する場を設けることにする。そして最終的には個人へとフィードバックして、表現を磨くことができる。教室には異なる個性を有する多くの学習者が集まっている。そこにはおのずと独自の「文化」が生成される。わたくしはそれを「教室の文化」と称しているが、この「教室の文化」を生かした評価を実現することも、「書くこと」の学びの構想に含めておきたい。

本稿では、主に学習者の「書くこと」に対する興味・関心の喚起という点を基盤とした学びに言及した。表現意欲を育てることが、最も重要な実践的課題と判断しているからである。子どもたちは本来、書くことが嫌いではない。にもかかわらず、学校で書かされる作文は苦手という声がある。もしも作文教育を受けることが彼らから書くことの楽しみを奪ってしまうとしたら、それはまさに本末転倒である。彼らが自らの生きる現実の中で少しずつ育んできた「書くこと」へ向かう意志を学校では大切にして、より広く大きな表現意欲へと育てる必要がある。

ケータイメールに代表されるように、子どもたちの日常の中には「書くこと」へ向かう意志に深く関わるメディアがある。そのようなメディアの持つ特性を授業にも積極的に取り入れて、「書くこと」の新しい学びを構想していきたい。それは、「書くこと」の日常化という課題に対して、新たな側面から光を当てることでもある。

まちだ　もりひろ　早稲田大学教育・総合科学学術院教授。学習者に身近なサブカルチャーの学習材開発と授業開発について研究を続けている。著書に『国語科授業構想の展開』（三省堂）など。